

小・中学校

平成 15 年 度

# 教育研究員研究報告書

へ き 地 教 育

東京都教職員研修センター

平成15年度

教育研究員（へき地教育）名簿

市町村名	学 校 名	氏 名
八王子市	横 川 小 学 校	府 金 博 之
青 梅 市	第 六 小 学 校	金 子 努
青 梅 市	吹 上 小 学 校	稻 葉 義 愛
檜 原 村	檜 原 小 学 校	清 水 治 彦
奥多摩町	氷 川 小 学 校	藤 井 繭 子
大 島 町	波 浮 小 学 校	植 場 鉄 平
新 島 村	新 島 小 学 校	鈴 木 可 奈 子

世話人  
副世話人

担 当 東京都教職員研修センター 統括指導主事 山 崎 淳

## 目 次

研究主題設定の理由	2
1 地域・学校の特徴	
2 児童の実態	
3 へき地教育研究の課題	
研究の内容と方法	3
1 研究仮説	
2 研究のキーワード	
3 指導の手だて	
4 各検証授業の位置付け	
研究構造図	5
調査研究	6
検証事例	9
1 「地域とのつながりを深める伝統芸能の学習」	9
小学校第5・6学年 総合的な学習の時間	
2 「野鳥を通して郷土の自然に触れ、自分や郷土の未来について考える活動」	14
小学校第5・6学年 総合的な学習の時間	
3 「民話を取材し、ペープサートで表現することにより、郷土に親しみをもつ活動」	19
小学校第2学年 生活	
研究の成果と今後の課題	24

## 研究主題設定の理由

研究主題を設定するにあたり、本部会（本年度は、全員が小学校所属）では、まず、「地域の実態」「児童の実態」をそれぞれ洗い出すことからはじめた。その結果、山間及び島しょ等、場所は様々であるが、おおよそ共通するところ、そしてそれに伴う目指す児童像が見えてきた。

そこで先に、「地域・学校の特性」「児童の実態」、そして昨年度からの「へき地教育研究の課題」で話し合われた内容を以下に述べることとする。

### 1 地域・学校の特性

都心から離れ、海、山、川など豊かで素晴らしい自然に囲まれた、西部山間及び島しょ地域である。近年では、少子化、高齢化、過疎化が進んでいるが、まだ代々その地に住む人々が多く、そこでは、密接で固定化された人とのつながりが色濃く見られる。その中では、その地域ならではの伝統文化が、地域の人々の手によって大切に保存、継承されている。また、未来を担う子どもたちや学校に対し、地域の人々はとても協力的で、期待も大きい。

しかし、マスメディアによる情報の氾濫や、社会情勢の変化による児童への影響も大きく感じられる。

### 2 児童の実態

児童の実態は、西部山間地域と島しょ、学校ごとによっても違いが見られるので、ここでは共通する実態を述べることとする。

純朴で、素直な児童である。自然に恵まれた豊かな環境の中で、のびのびと生活しており、少人数のため、集団としてのまとまりもある。異年齢でのかかわりや交流も多く行われている。しかし、固定的な集団の中で育っているためか、自分の思いをきちんと表現したり、自ら求め、積極的に行動したりすることは苦手な児童が多い。また、マスメディアから溢れ出す都会の華やいだ情報にあこがれを抱き、自分の住む地域、ひいては自分自身に誇りをもてないでいる児童もいる。

地域には変化に富んだ自然と大きな活動空間があり、かつては自然の学舎であった。しかし今日では、社会の変化に伴い、生活様式や価値観の多様化が進み、児童は自分たちの住む地域社会や自然に対して、かかわりや関心を希薄化させつつある。伝統を守る人々や、豊かな自然には恵まれているが、地域の人々や自然と親しむ機会は減少してきている。

### 3 へき地教育研究の課題

平成 14 年度教育研究員「へき地教育」部会では、「社会性の基礎となる表現力を高める指導」の在り方を探った。その際、残された課題は、『継続的・日常的に表現力を向上させるた

めの指導を行い、子どもたちの表現力をより高めること』である。そこで本年度は、児童一人一人が自信をもって表現しようとする態度を育てることが重要であると考えた。

以上のような実態や課題から、自分たちの住む郷土に誇りをもつとともに、自分に誇りを持ち、臆することなく積極的に行動することのできるたくましい児童を育てたいと考えた。そのために、地域素材を掘り起こし、地域の特性を生かした活動を工夫、改善し、指導の在り方について探ることを研究のねらいとした。

そのため研究主題を『郷土のよさに気付き、自分に誇りをもてる児童の育成』とし、仮説を立て、授業実践を通して検証することとした。

## 研究の内容と方法

研究の方法は、先行研究の分析や調査研究により、地域や児童の実態を把握し、「こんな児童になってほしい」という教師の願いを描き、研究主題を設定した。次に、それに迫るための研究仮説を立て、研究仮説を具現化するための指導の手だてについて共通理解を図った。さらに、指導の手だての共通理解のもと検証授業を行い、手だての有効性を探り、仮説を検証することとした。

### 1 研究仮説

前項目で述べた様々な実態より、児童には、

- ・自分たちの住む郷土に誇りをもつとともに、自分に誇りをもってほしい。
- ・新しい場面に出合ったときに、臆することなく積極的に行動してほしい。

と考えた。

そして、研究を進めていくにあたって、次の研究仮説を立て、研究を深めることとした。

地域の文化・自然・地理・人間関係を生かした主体的な活動をすることにより、日頃意識されにくい郷土のよさに気付き、自分に誇りをもてる児童が育つであろう。
--

すなわち、自分たちの住んでいる地域にかかわり、自分と地域とのかかわりや、自分たちが住む郷土のよさに気付くような活動を意図的、積極的に取り入れていくことにより、自分に誇りをもつたくましい児童が育つであろうと考えた。

### 2 研究のキーワード

研究主題を設定するにあたり、何度も出てくるキーワードを吟味し、次のように共通理解した。

地域の特性とは・・・その地域ならではの、もしくは、長い歴史の中で培われてきた文化・自然・地理・人間関係などのこと。

特性を生かした活動とは・・・地域の特性を取り入れて、学んで、それを地域に返すこと。

よさに気付くとは・・・長い歴史の中で培われ、今後も受け継がれていくべき文化・自然・地理・人間関係などを実感できること。

誇りをもつとは・・・自分のよいところや頑張ったところなどを認め、自分に自信をもって意欲的、主体的に行動すること。

### 3 指導の手だて

教育研究員の所属校では、児童の実態や地域の特性はそれぞれ異なる。また、教科等によっても指導のねらいは異なる。そこで、学年や教科を問わず次のような指導の手だてを行うことにより、研究仮説に迫ることができるものと考えた。

#### 地域素材の教材化

日頃見落としている地域の特性を掘り起こし、児童の実態や教師の願いに応じて教材化を進め、積極的に地域とかがわっていく。そのためには、まず積極的に教師が地域に出て、地域とかがわり、地域を知る必要がある。また、自分たちの住む地域の素材で学ぶことは、児童の興味・関心を高めたり、地域への愛着を深め、よさに気付いたりすることへとつながり、研究主題へ迫るための最大のポイントとなる。

#### 体験を重視した学習活動の工夫

実際に活動することにより、一人一人の心が揺さぶられ、多くの気付きや疑問などをもつことができる体験となる。これにより、児童の活動は意欲的、主体的な活動となってくる。さらに、活動するだけでは終わらず、児童が自分とのかかわりを考えることができるような単元構成を工夫することも重要である。

#### 発表の場の工夫

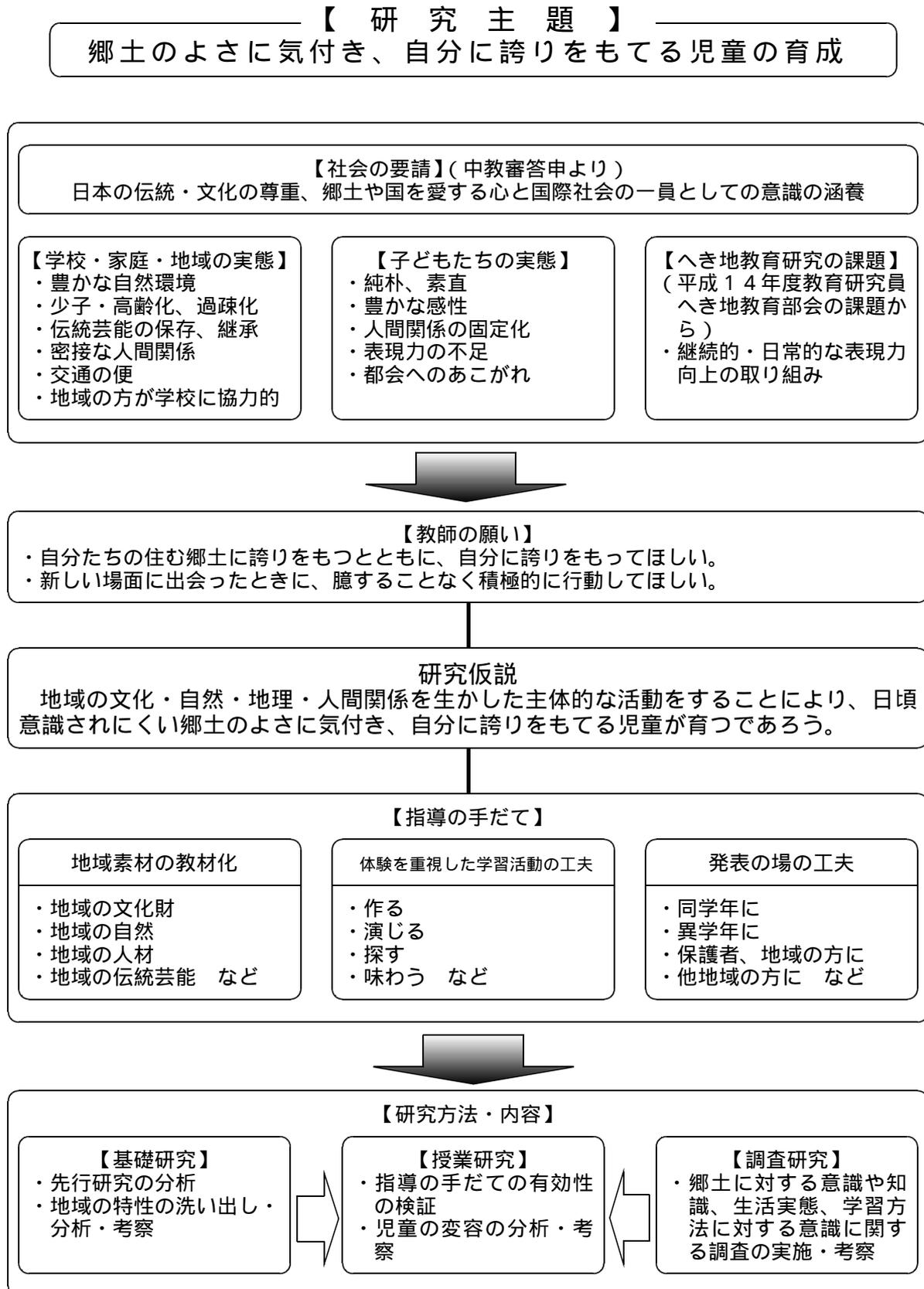
多くの人に認めてもらい、ほめてもらうことは、児童の大きな自信となる。これまでの自分の活動を振り返ったり、今後の意欲となったりすることができる。また、発表するという目的意識により、活動も意欲的になり深まっていく。このような経験を重ねていくことにより、児童は自分自身に誇りをもつことができる。

### 4 各検証授業の位置付け

	検 証 事 例 (実践順)	学習活動の内容
1	「氷川獅子をつくろう」 小学校第5・6学年(総合的な学習の時間)	地域の獅子舞や篠笛など伝統行事に実際に取り組み、地域を深く味わう。
2	「バードカーピングを作ろう」 小学校第5・6学年(総合的な学習の時間)	野鳥を作る中で、豊かな自然に目を向け未来の檜原や自分について考える。
3	「はっけん、ぼくらのまちのむかし話」 小学校第2学年(生活科)	地域に残る昔話を探し、それを表現し、地域に対する親しみをもつ。
4	「見つけよう!ぼくらにできること ～環境に優しいまちをめざして～」 小学校第5学年(総合的な学習の時間)	まちづくりに参加することで、地域に目を向け自分のまちの未来について考える。

## 研究構造図

次の研究構造図は、前述の「研究主題設定の理由」及び「研究の内容と方法」について構造化したものである。



## 調査研究(1)

### 1 調査目的

西部山間及び島しょ地域の児童の「地域観」「生活観」「学習観」について調査を実施することで、研究の方向性を明確にし、授業研究での指導に生かす。

### 2 調査対象

【小学校】西部山間地域5校、島しょ2校、1～6年生、計979人

### 3 実施時期 平成15年7月

### 4 調査結果と考察

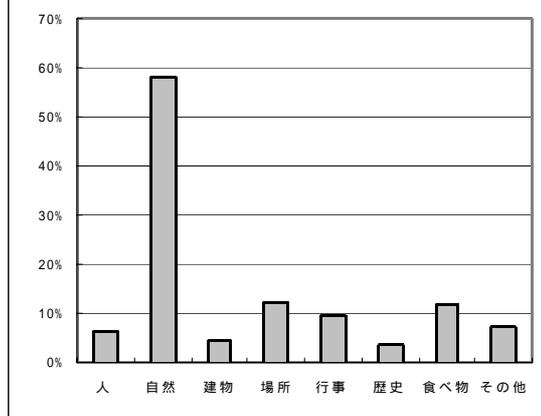
#### (1) 地域観

【考察】 「地域観」に関する質問では、9割を超える児童が、住んでいる地域が好きであると答えた。しかし、高学年になると住んでいるところが「好き」と答えても、将来的には郷土を離れ生活したい児童もいる。それは、将来の自己実現や進学・就職のためと考えられる。また、「自慢したいもの」の質問（1参照）では「自然」について強く意識している割合が多かった反面、山・海・川で遊んでいる児童が少ないことも明らかになった。このことから、児童にとって自然は常に身近にあってかわりをもつものというイメージよりも大切に守るものというイメージが強いように思われる。また、児童自身の思いの他に、大人たちのつぶやきやイメージ、あるいは『自然=大切なもの』という情報が児童の考えや感じ方の中に影響を及ぼしていることも要因として考えられる。

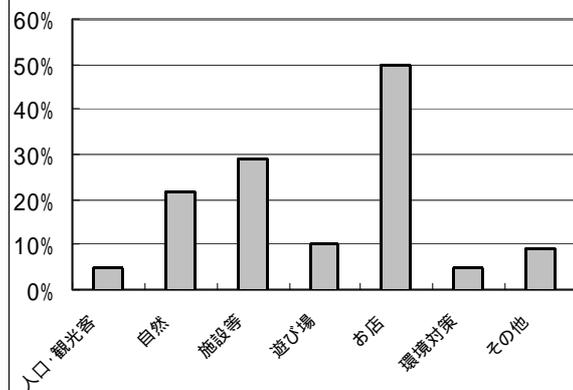
「住んでいるところで、これから増えてほしいこと、減ってほしいことは何か」の質問について、低学年では身の回りに関心があり、高学年になるにつれ視野が広がる傾向にある。

「増えてほしいこと」への意識（2参照）は「施設」、「お店」が高く、便利さを求めている。一方で、高齢者福祉施設などの福祉施設や医療機関の充実を願っていることも注目すべき点である。グラフ化していないが「減ってほしいこと」の設問では、ゴミなどの「環境」に関する問題に強く関心をもっていることが分かった。

1 紹介や自慢したいもの(複数回答)



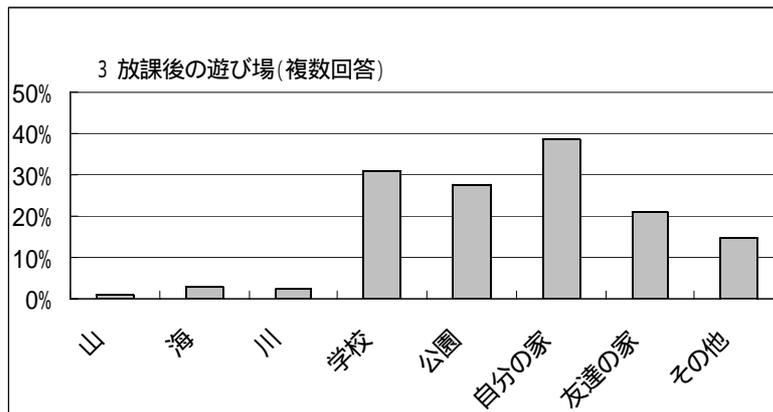
2 増えてほしいこと(複数回答)



## (2) 生活観

〔考 察〕 「放課後の遊び場」についての調査（ 3 参照）では、最も多かったのは「自分の家」である。遊びの内容としては、「テレビゲーム」が多かった。次いで、放課後の遊び場として多かったのは「学校」である。それは、学区域が広範囲にわたるため、児童同士が簡単には遊びに行くことができないへき地特有の地理的事情が背景にあるからだと考えられる。

「祖父母との同居」についての割合は36.8%と高く（都全体では27.7%・都生活



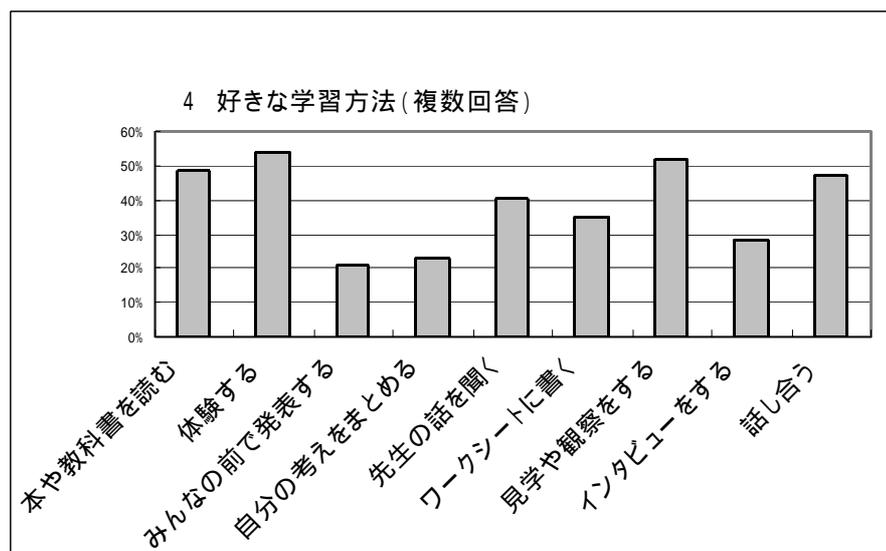
文化局調べ) 祖父母と同居している児童の方が同居していない児童よりも「住んでいるところが好き」と答えた割合が多かった。

このことから、祖父母との生活の中で地域の魅力に触れていることも想定できる。

## (3) 学習観

〔考 察〕 「好きな学習方法」( 4 参照) では、「体験する」、「見学や観察をする」が多い。実際の作業や体験を通じて学習したいという気持ちの表れである。実体験を伴った学習活動を意図的に取り入れていくことで一層の効果が期待できる。その一方で「本や教科書を読む」のように従来からの典型的な学習方法も支持されている。しかし、この結果は教師の日常的な指導方法や取り組みによっても左右されるので、今後の手だての工夫によっては、変化が期待されるものも数多く含まれている。

例えば、児童が比較的苦手としている「みんなの前で発表する」「自分の考えを書いてまとめる」なども繰り返し学習活動を重ねていくことで、自信をもって意見や考えを表明できるようになると考えられる。



## 調査研究(2)

### 1 調査目的

西部山間地域の児童の「地域観」「生活観」「学習観」について調査を実施し、7月の調査結果と比較することで、授業実践の成果を検証する。

### 2 調査対象

【小学校】西部山間地域3校、2、5、6年生、計100人

### 3 実施時期 平成15年11月

### 4 検証授業後の調査結果と考察

【考 察】 検証授業後「地域観」に関する質問で、検証授業を実施した西部山間地域の3校に限って調査した結果、住んでいる地域が好きな割合は82%から84%へとわずかではあるが上昇した。また、「自慢したいもの」の質問では「自然」についての割合が多かったが、検証授業後は「行事」「歴史」といった異なる分野にも、視野が広がっていったことが分かった。特に、「住んでいるところで、これから増えてほしいこと、減ってほしいことは何か」の質問では、環境対策に関する意識が前回の調査よりも著しく高くなった。

【考 察】 検証授業前「生活観」の実態調査で、児童の遊び場として最も多かったのは「自分の家」で、次いで多かったのは「学校」であった。しかし、検証授業後の調査では両者とも多かったものの、「学校」での割合が「自分の家」よりも上回った。しかし、遊びの内容に変化は見られなかった。

一方で、遊びや余暇の時間を使って、授業で学習したことを発展的に取り上げる姿勢も見られるようになった。例えば、友達同士で「地域の先生に篠笛を習いに行かない？」と誘い合ったり、バードカーピングのために野鳥を双眼鏡で観察したり、カメラで記録に残そうとする児童も見られるようになった。

【考 察】 好きな学習方法について検証授業の前後を比較したが、全体的には大きな変化が見られず、似たような結果となった。今後も、学習の指導方法については系統的に計画していくことが大切だと考えられる。また、児童から「お囃子で和太鼓を取り上げてほしい」という要望が聞かれるようになったり、民話に興味をもった児童からは「昔話を読んでほしい」という声も聞かれたりするようになった。このことから授業を通じて、学習に対する視野が広がり、郷土に対する興味や関心がはぐくまれていると考えられる。

## 検証事例

検証事例 1	「地域とのつながりを深める伝統芸能 の学習」	6月～10月実施 小学校第5・6学年 総合的な学習の時間
-----------	---------------------------	---------------------------------

### 1 単元名 「氷川獅子をつくろう」

### 2 研究主題と本単元との関連

奥多摩町は、自分たちの住む町の自慢できるものとしてほとんどの子が「自然」と答えるほど自然に恵まれている。しかし、現状では山や川は危険なので子どもだけで遊んではいけないとされ、虫を捕まえたり動植物に興味をもったり、自然と触れ合う体験をしている子は少ない。山も「おじいちゃん、おばあちゃんの行く所」と考えている子どもも多く、高齢者との同居率は高いが、共通の体験は少ない。自然は豊かだと認識しているが、マスメディアや大人たちの言葉にとらわれていて、実体験として持っているかどうかは疑わしい。

また、限られた人間関係の中での狭いコミュニケーションしか体験していない子どもたちにとって、見知らぬ土地や見知らぬ人とのふれあいが苦手だったり、臆してしまう傾向がある。

将来的に、進学や就職などで広い地域に出て行くことが予想されている子どもたちが、自分たちの拠り所である地域に自信や誇りをもつことは、自分への自信や誇りとなり、自己実現につながると思う。

この研究では、地域の伝統芸能である獅子舞やお囃子を体験することで、自分たちの地域を深く味わい、よさを体感し、自信へと導いていくことをねらいとしている。全校での取り組みであるが、ここでは検証授業を行った第5・6学年のお囃子グループについて記述する。

### 3 単元の目標

- (1) 郷土の文化を学び、共に創作したり表現する喜びを全員が味わう。
- (2) 異学年集団での学び方やものの見方を知り、協力・共同の学習により、縦割り班・全校の表現「氷川獅子」を創り上げる。
- (3) 地域の人々との交流や郷土文化への関心や理解を深め、尊重し、継承・発展していこうとする態度をはぐくむ。

### 4 評価規準

#### 課題設定の力

グループで協力し、工夫して獅子舞を創作している。

自分に合った練習の仕方を見つけ、取り組んでいる。

#### 追求する力

最後まで課題と向き合い、粘り強く努力している。

### 伝え合う力

友達や下級生に教えたり、教えられたり、励まし合ったり、お互いに評価し合ったり、友達のよいところを感じている。

お互いの様子を感じ取ったり相談したりして、補い合ったり助け合ったりしている。

### かかわる力

友達や下級生や地域の人々に質問をしたり教えてもらったり、積極的にかかわっている。

### 振り返る力

獅子舞のおもしろさを体感しリズムにのり生き生きと表現し、表現の喜びを味わっている。  
自分の住む地域に対し、関心をもっている。

### 各学年の主な活動内容

	芸術的総合・生活科	音楽的総合	身体的表現
1・2年	ぼたんの花(おはな紙)		踊り練習(獅子舞を知っている児童が中心)
3・4年	制作...花笠用花飾り 芯花(こよりも) ささらスリ棒 つるし花飾り 修理...花笠	和太鼓・ささらの体験	踊り創り(動き) 踊り指導(踊りリーダー)
5・6年	制作...篠笛 修理...獅子頭 太鼓	篠笛練習(音楽リーダー) 「道中」「メドレー」 「たんじゃく」 「ちらし」「三拍子」 「ばち切り」	踊り創り(構成、動き) 踊り指導(踊りリーダー)
* 5・6年生は、道具作り・踊り創り・楽器の練習を6月末までに全員が体験する。 その後、各自が選択して分かれて活動する。(リーダーとして活躍)			

### 5 単元設定の理由

本町は、東京都の最西端に位置し、広大な面積を有しているが、94%は山地である。最盛期には、山林経営や木材業に加え、ダム工事の関係もあって、約15,000人の人々が生活を営んでいたが、現在では経済の停滞と人口の流出などにより、約8,000人に減少し、過疎化は年々進行している。町の主産業は観光であるが、町内就業者の数は少ない。かつては、町内就業がほとんどであり、林業を中心としていたが、現在は保護者の三分の二が町外に就業している。

地域には獅子舞、お囃子、神楽などの伝統芸能が多く残されており、毎年夏には各地区により祭礼が行われ、文化的にも豊かな地域であるが、伝統文化の継承者が育ちにくい現状である。古くから獅子舞のある地域では、継承が難しく、町外へ出ていった人たちが祭りの時期に戻ってきて祭りが成り立っている地域もある。

現在では、門戸が広く開かれ多くの人に伝統文化継承の機会が与えられている地域も多い。しかし、実際は親がかかわっている家の子どもは取り組んでいる場合が多いが、新しいところに自分から飛び込んでいく子どもは少ない。

本單元では、児童にとって地域が身近に感じられるようにし、また、地域にとっても子どもが「町の子どもたち」と感じられるように、地域とのかかわりを深めていく。同時に、全校で一つのを創り上げる喜びと達成感、表現の楽しさを味わい、それが自信につながっていくと考える。10地域ある獅子舞のうち、今年度は学校周辺の地域の獅子舞を学び、自分たちの獅子舞を創ることとする。

## 6 児童の実態

本校の児童は全体的に素直で純朴で仲がよく、学校が大好きである。縦割り班活動にも力を入れ、高学年になるにしたがい面倒見がよく、責任感が強くなっていく。

獅子舞グループとお囃子グループに分かれたため、お囃子に取り組む児童は、第5・6学年の一部の児童である。今回のお囃子では希望者が多く、オーディションで募った。

## 7 指導計画（33時間扱い）\*高学年 お囃子グループ

時	学 習 活 動	支 援 評 価
2	<p>昨年度の取り組みを振り返ったり、ゲストティーチャー（以下 GT と略する）の人たちに来てもらったりして、これからの活動の見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・獅子舞についての説明</li> <li>・実際の演技と演奏</li> </ul>	<p>ビデオなどで昨年度の取り組みを思い出させたり、興味をもたせたりする。</p> <p>伝統の素晴らしさを伝える。</p> <p>興味をもって見たり聴いたりできたか。</p>
4	<p>GT から獅子舞の基本の足を教えてもらい、獅子舞を体験する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・道中</li> <li>・ばちきり</li> <li>・三拍子</li> </ul> 	<p>T<sub>2</sub>となり、動きを分かりやすく示すなど、個別に対応する。</p> <p>楽しんで体験できたか。</p> <p>地域の人に積極的にかかわれたか。</p>
6	<p>篠笛の体験をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5年生は基本の練習や簡単な童歌を練習する。</li> <li>・6年生は各地域のお囃子などを練習する。</li> </ul>	<p>基本的な楽器の扱い方を覚えられるようにする。</p> <p>篠笛に親しんだか。</p>
4	<p>篠笛を作る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・塩ビパイプを削って色を塗り、ニスを塗って篠笛を作成する。</li> </ul> <p>獅子頭の装飾</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度作った獅子頭の修繕や装飾をする。</li> </ul>	<p>実物から設計図を作り、正確な音程が出るようにする。危ない機械は補助をする。</p> <p>丁寧に作業し、完成まで努力できたか。</p> <p>自分の篠笛に愛着をもてたか。</p>
8	<p>獅子舞グループとお囃子グループに分かれる。</p>	<p>自分たちで選べるように、それ</p>

		までの体験を大切にする。
	<p>獅子舞グループは更に3チーム(赤・白・青)に分かれ、自分たちの動き、隊形を相談しながら作っていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・獅子舞リーダーが中心となり、動きを工夫しながら練習を進める。</li> <li>・グループごとに発表をし合いながら、評価し合い、工夫を加えていく。</li> </ul>	<p>お囃子グループは GT に教えてもらったり、ビデオを見たりして、お囃子のメロディを覚え、練習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちに合った練習方法を見付け、ふけるように努力する。</li> <li>・友達と呼吸を合わせ、音が途切れないようにお互いを意識しあう。</li> </ul>
	<p>お囃子と獅子舞を合わせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校庭での動きをつかむ。</li> <li>・お互いの動きや音を把握する。</li> </ul>	
2	<p>全校で獅子舞を合わせる</p> <p>高学年：獅子舞・お囃子</p> <p>中学年：ささら・花笠</p> <p>低学年：はやし方</p>	<p>テンポを保てるように意識させる。</p> <p>お互いの音を聞きながら演奏、演技できたか。</p> <p>合わせた後で新たな課題がもてるように促す。</p>
	<p>運動会での発表</p>	<p>マイクなどで音量を調整するなど、演奏しやすい隊形を考える。</p> <p>全体の動きに合わせることはできたか。</p> <p>友達と協力したり心を一つにしたりできたか。</p>
1	<p>感想の発表とまとめ</p>	<p>気持ちに余裕をもって演奏できるように気を配る。</p> <p>リズムにのり、楽しく表現できたか。</p> <p>みんなで協力しようとしていたか。</p> <p>やり遂げた達成感を味わうことができたか。</p>
		<p>ビデオを見せたり、本番の様子を思い出させたりする。</p> <p>地域に対して関心や理解を深めることができたか。</p>

## 8 成果と課題

### (1) 成果

#### ア 地域素材の教材化

今回取り上げたのは、子どもの人数も多く、体験者の多い地区の獅子舞・お囃子などだった。その結果、児童の中から練習のリーダーが生まれ、児童同士の教え合い、磨き合いができ、自主練習を行うなど児童主体の活動が生まれた。また篠笛の学習も楽譜に落としたりビデオを作ったりすることで自主的な学習を促すことができた。

児童の主体的な活動には、児童が自分たちで学び合えるように地域素材をいかにうまく教材化することが大切であるかが分かった。

地域の人たちにゲストティーチャーとして度々学校に来ていただき、教えていただいたりアドバイスをいただいたりした。地域の人々が児童にとって尊敬すべき存在であり、憧れの対象となり、地域の人々にとってもよい結果となった。児童にとっては、同じ地域に居ながらふだんは気付かない地域の人とのかかわりができ、地域へ目を向けることになった。また、回数を重ねるうちに自分たちから地域の人に積極的にかかわる姿も生まれてきた。地域の人たちも学校に対して興味をもち、「おらが町の子どもたち」という意識で児童を見てくれるようになった。また、ゲストティーチャーの子どもを育てる姿勢が優しく、児童を取り巻く環境のよさを感じ取ることができた。学校の取り組みと地域の願いが一致していて、理解と協力が得られた点では、よい単位であったと考える。

#### イ 体験を重視した学習活動の工夫

知識の習得や鑑賞だけでなく、実際に体を動かしながら友達や地域の人々とかかわり合うことは、児童の学習意欲を高める上で効果的だった。今後は、町の歴史や地域の行事などを調べたり、体験したりすることを通して、まとめの活動を行っていききたい。

#### ウ 発表の場の工夫

全校の取り組みとして運動会で発表する他、高学年では、地域のふれあい祭や合同音楽会、隣接する小学校の学芸会に参加しての発表など、保護者、地域の人々に広く発表する場を設けた。その結果、児童は自信をもち、地域の人たちも学校に関心を示した。

### (2) 課題

この実践は、毎年学区域内の各地区の獅子舞をランダムに回っていくものと考えているが、中には取り組みにくい地区も出てくると予想される。例えば、教材化が難しかったり、児童の中に体験者が少なかったり、篠笛が学校にある六穴ではなく、七穴など学校のものでは対応できない場合である。また、今回は地域の人材に恵まれ協力が得られたが、地区によっては人口が少ないところもあり、その場合学校の負担が大きくなるであろう。

毎年行っていくことで児童の意識の中でマンネリ化をするのではないかという心配もあるが、低・中・高学年での上級生が主導し教えるというシステム、隔年で制作するものを変えるという2年サイクルなどで、児童の意識を新鮮なものに保ち続けるよう努力していかなければならない。

また、地域の伝統芸能として歴史や成り立ちを学習したり、その他の伝統芸能について調べたりなど、発展して学習を進めることも必要であると考えている。

検証事例

2

「野鳥を通して郷土の自然に触れ、自分や郷土の未来について考える活動」

10月実施  
小学校第5・6学年 総合的な学習の時間

### 1 単元名 「バードカービングを作ろう」

### 2 研究主題と本単元との関連

緑溢れる檜原村には、近隣または遠方から季節を問わず観光客が訪れる。観光客のめあては、ひっそりと咲く野山の花であったり、山頂の絶景であったりと様々である。檜原を訪れる人々は、それら檜原の自然に価値を見だし、そしてそれに触れにやって来るのである。

檜原に住む子どもたちも、この地が自然の豊かな所であることは知っている。夏になれば川に入り水と戯れることも少なくない。しかし、この環境が全都的に見て特異で貴重な財産であるという認識は弱い。それはあまりにも身近で当たり前にあるものだからである。そうした中、都会の便利さに強く憧れ、郷土の不便さを嘆く児童もいる。これら郷土に対する負の印象をぬぐい、檜原のよさを再確認するためには、豊かな自然やそこに生きる人々の生活、そして人と自然とのかかわりの一端に改めて触れることが必要であると考えます。

そこで豊かな自然の象徴の一つとしての野鳥を題材にし、作品（バードカービング）を制作していく授業を計画した。檜原に棲む野鳥の中から、自らの作る野鳥を決め、調べ、作る中で児童はその野鳥に興味と愛着をもつはずである。そしてその活動の中で、より一層檜原の自然と向き合うことができると考える。そして制作した後、一生懸命に取り組んだ作品を前にした時に、改めて檜原村に住む自分を客観的に考えることができるのではないかと考える。

これらのねらいを確実に実現させるための手だてとして、体験を重視した学習活動を計画する必要がある。バードカービングを作ること自体も体験であるが、それだけではなく、実際に山へ出かけ野鳥を観察したり、専門家の話を聞いたりするなど生の情報に触れさせ児童の意欲を喚起したいと考える。

また、作り上げた作品を多くの方に披露し活動を認めてもらうことで、児童は自らの活動を振り返り、自分の活動に自信をもち、次の活動への意欲を高めていくことができる。具体的には自校の展覧会、西多摩郡図画工作展及び新宿御苑で開催されるバードカービング展への出品を計画している。

バードカービング一つを完成させるには、高い集中力とたゆまぬ努力、そして確かな技術が必要である。それだけに作品を作り上げたときの成成感はひとしおである。ここで努力したことが一人一人の児童の確かな自信の獲得につながるはずである。

なお、本授業は総合的な学習の時間の位置付けであるが、内容によりめあてに沿って図工科の扱いにしていくものとする。

### 3 単元の目標

- (1) 郷土の自然に目を向け、よさを再確認し、大切にしていこうとする心情を育てる。
- (2) 優れた知識・技術をもつ人に触れ視野を広げ、知識や技術を身に付けていくとともに向上心をもつ。
- (3) 最後まで粘り強く取り組み、自分に自信をもつ。

#### 4 単元の評価規準

##### 問題解決

###### めあてをもつ

- ・ 檜原の野鳥から自分の作りたい野鳥を選んでいる。

###### 工夫して実行する

- ・ 順を追って、一つ一つ丁寧に作業を進めている。

###### 学び方・考え方

- ・ ゲストティーチャー（以下G Tと略する）の話を自分の制作に生かせるように聞いている。
- ・ 意欲的に課題と向き合い、様々な方法を試し追求している。
- ・ 自らの知識・技術を仲間提供している。

###### 情報の収集と活用

- ・ 書籍及びインターネット上で収集した情報を、自らの作業に役立つようにまとめている。
- ・ G Tに質問し、有用な情報を手に入れている。

##### 主体性

- ・ G Tに教わった手法を、積極的に利用している。
- ・ 工夫しながら粘り強く対象と向き合っている。
- ・ 諦めずに完成に向けて取り組んでいる。

##### 生き方

- ・ 野鳥や自然に対して自分の考えをもっている。
- ・ 自分と地域とのかかわりを考えている。

#### 5 単元設定の理由

檜原小の児童に「郷土のよいところは」と尋ねると、学年を問わず「自然」と答える。しかし、山に分け入り、木の実を採ったり野生動物や昆虫に触れたりすることは少ない。野鳥に関する知識といえば、スズメやカラスそして学校に営巣するツバメの名前を知っている位であり、草木の知識も都会の子どもと比べ変わりはない。主な遊びといえばテレビゲームなのはどこでも同じである。そんな児童が郷土のよさを知るためには、まず、自然に触れることが必要であると考えた。児童の意識を山や森に向かわせるということである。

本単元では自然に触れる手がかりを野鳥とした。これは野鳥が可愛らしく、きれいな声でさえずり、色鮮やかである等多くの魅力をもつ生き物であるということが、児童の意欲付けになると考えたからである。また、身近な所にその道のエキスパートといわれている方がおり、G Tとして協力していただけるということも大きな要因となっている。

野鳥を木材で作るという作業を通して、児童が自ら選んだ野鳥を想い、さらには檜原の自然をも視野に入れた思考ができることを願い、本単元を設定した。

#### 6 児童の実態

保育園からほとんど変わらないメンバーで生活を共にしてきている。その結果、言葉に出さなくとも相手が何を言いたいのか、何を考えているのかが分かってしまう。互いに理解し合っているという面では好ましいことであるが、話したり、聞いたりする力を育てていきた

いという側面も併せもっている。

また、三世同居の家庭が三分の二程度あり、高齢者との触れ合いは多い。少数ではあるが家庭において高齢者のもつ技術を伝授されている児童や、共に山に出かけ自然に触れている児童もいる。

学年の人間関係に変化が乏しい分、学年を問わず休み時間に遊んだり、縦割り活動などに意欲的に取り組んだりするなど、異学年集団の活動にも積極的に取り組む力をもっている。6年生を送る会や年2回のロング集会活動など、児童の発案で進める行事などについては、高学年が低・中学年をリードし充実した活動を運営している。

バードカーピングには昨年度から取り組み始めているので、6年生にとっては2回目の活動となる。昨年度の活動をふまえ、さらなる意欲をもって学習することを楽しみにしている。また、5年生は昨年度の先輩の活動を見ており、5年生なりの希望をもって学習を待っている状態にある。

#### 7 指導計画（28時間扱い 本時27 / 28時間）

時	学 習 活 動	支 援 評 価
1	・ガイダンスに参加し、学習の見通しをもつ。 ・自分の作りたい野鳥を決定する。	理解しやすいように具体物を示し説明する。 学習課題としての野鳥を自ら選んでいる。
2	・作る野鳥の資料を収集する。	インターネットにおいて探しにくい野鳥については
3		予め準備しておいた URL を提示する。
4		野鳥の色合いが分かる資料を収集している。
5	・作る野鳥を平面作品で表す。	アドバイス
6	5年生・・アクリル画	「羽毛を構成する一本一本の毛を丁寧に描くことで柔らかい雰囲気がでるよ。」
7		
8	6年生・・バーニングペン画	自らの技能で羽毛・風切り羽・足・樹木等のタッチ
9		の違いができるだけ出せるよう仲間の良い見本を提示する。
10		愛情をもって丁寧に野鳥の絵を描き上げている。
11	・バードウォッチングに行き、野鳥の生態や行動に興味をもつ。	GT の話をかみ砕いて児童に伝える。 檜原の野鳥の概要を理解している。
12		
13	・作る野鳥について疑問に思っていることを専門の方に尋ね解決する。	バードカーピングの制作に対して意欲を高めている。
14		
15	・バードカーピングを制作する。	自ら制作できるよう手順を示した制作ガイドをグループごとに配布する。
16	野鳥の足を作る	個別指導を行い、作業が遅れている児童の原因を探り改善策を知らせる。
17		
18		
19	野鳥の胴体を丸める	制作上必要な技能
20		ラジオペンチの操作 小刀の操作 彩色の際の筆
21	野鳥の胴体と足を接合する	使い
22		

23		G Tの説明を聞き、理解し、意欲的に制作している。
24		途中で投げ出さずに粘り強く制作している。
25	野鳥の彩色をする	
26		
27	・学習を振り返りまとめる。	学習を想起できるよう、資料・作品を展示する。
本時		檜原の野鳥に想いを寄せ学習を振り返っている。
28		檜原村のよさを再確認している。

## 8 本時の展開

### (1) 本時の目標

自分の活動を振り返りまとめる。

自分と地域のかかわりについて考えをもつ。

### (2) 本時の展開

学 習 活 動	支 援	評 価
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新宿御苑バードカーピング展の様子をビデオで視聴し自らの活動の一般的な反応を知る。</li> <li>・感想を発表する。</li> </ul>	<p>具体的な感想をもつことができるよう、観点表を掲示する。</p> <p>・会場の雰囲気はどうか</p> <p>・評判はどうか</p> <p>・どういう所をほめて</p> <p>いるか</p>	<p>客観的に自らの活動の成果をとらえることができたか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・G Tからの手紙を読み、課題、を理解する。</li> <li>・課題を解決する。 グループでの話し合い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題 「新宿にカラスが多いわけ」を掲示する。</li> <li>・写真資料を掲示する。</li> <li>・理解の難しい子には言葉を言い換え、思考できるようにする。</li> <li>・リーダーを中心に人任せにせず柔軟な思考ができるように声をかける。</li> </ul>	<p>グループの話し合いで、檜原に比べ新宿にはカラスが多い原因を探ることができたか。</p> <p>人任せにせず積極的に意見を述べたか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループでの話し合いの結果を発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・板書を工夫し、思考の整理ができるようにする。</li> </ul>	<p>カラスが少ない檜原は住み良いところであると気付けたか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートに課題 に対する自らの考えを書き、自分の意志を確定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題 「檜原の野鳥を守るためにできること」を掲示する。</li> </ul>	<p>自分と地域のかかわりについて考えをもつことができたか。</p>

## 9 成果と課題

### (1) 成果

#### ア 地域素材の教材化

野鳥を取り上げた理由は、野鳥のもつ魅力が児童にとらえやすいものであったからである。檜原に棲む野鳥を図鑑やインターネットで調べる中で、「キビタキって黄色が鮮やかでとっても可愛い。」「モズのくちばしは鷲や鷹みたいにとがっていてカッコいい。」などの発言が多くでた。自らの好みに合わせて野鳥を選定できるということが、児童の学習を深化させた要因の一つであると考えられる。それほど檜原村には多くの野鳥が棲み、または飛来しているということである。一連の活動を終えた後、児童の野鳥に対する意識は明らかに変化している。校庭の桜の木の枝でシジュウカラがさえざってれば、「俺の鳥が来た。」とって仲間知らせたり、ハクセキレイが頭上を通過すれば「あいつ最近よく来るよな。」と言って微笑んだりしている。檜原に棲む野鳥について意識が向き、学習のまとめでは自然の象徴の一つである野鳥を守っていかこうとする心情が芽生えた。このことがやがては郷土を愛し、郷土に誇りをもてる人になっていくことの基盤になると信じている。

#### イ 体験を重視した学習活動の工夫

5・6年生ともに、実際に作ったり、体を動かしたりする学習が好きである。最後まで生きた学習を進めるために、多くの体験的な活動を取り入れることにした。また、その道のエキスパートといわれる方からの直接指導も取り入れ児童の意欲を喚起した。都民の森におけるバードウォッチングの活動は残念ながら悪天候のために中止となったが、代わりに行った野鳥の講義では4時間にも及ぶ長い話であったにもかかわらず、児童は一心に話を聞き、メモをとっていた。GTが見せてくれた数多くの野鳥の剥製や、口笛による野鳥の鳴き声が児童の興味・関心をとらえたからだと思われる。さらにバードカービングの制作を指導してくださった先生は、世界大会で優勝するなど確かな技術をもっているだけでなく、子どもに対する語り口が優しく、常に子どもを励ますような姿勢で指導に当たってくださった。信頼できるプロからの励ましの言葉は、児童の心に響き、大きな喜びとともに確かな自信をも芽生えさせてくれた。

#### ウ 発表の場の工夫

懸命に努力し作り上げた作品を、多くの方に見てもらい、活動自体を認めてもらうことが児童の自信につながると考えた。新宿御苑におけるバードカービング展に全作品を出品したことで、それはより確かなものになったと考える。実際に会場に足を運んだ児童も多く、今までにない雰囲気の中に自分の作品が展示してあったことの喜びを語る児童が多かった。

### (2) 課題

今回で2年目の取り組みとなる本活動では、学習のまとめ方が課題であった。昨年度は主に野鳥保護をテーマにし、自らの思いをポスターで表し、掲示した。この活動を通して、児童はおぼろ気であった自分の思いを明確にすることができた。本年度はGTからの質問に答える形をとり、自然保護と自らの役割について考えをまとめた。GTに返事を書く中で自然発生的に話し合いがもたれるなど、積極的な取り組みが見られた。来年度の取り組みでは、大きな驚きや感動があり、思考の深まるような学習のまとめ方をすると考える。

検証事例 3	「民話を取材し、ペープサートで表現することにより、郷土に親しみをもつ活動」	11月実施 小学校2学年 生活
-----------	---------------------------------------	--------------------

## 1 単元名

「はっけん！ぼくらのまちのむかし話」

## 2 研究主題と本単元との関連

本校は、秩父多摩国立公園の玄関口に位置し、南に多摩川の清流を見下ろし周囲を山に囲まれ、四季ごとに変化する美しい自然環境に恵まれている。子どもたちはそのような環境の中でのびのびと生活していて、「空気がおいしい」「山菜がたくさん採れる」など周辺の豊かな自然を自慢気に口にすることも多い。しかし子どもたちの生活の様子を詳しく見てみると、予想以上に家の中での遊びに夢中であったり、虫や植物の名前を知らなかったり、豊かな自然を満喫しているとは言い難く、都心部の子どもたちと自然についての意識についての差はなくなってきている。また、高学年になり視野も広がってくると、「お店が少ない」「電車の本数が少ない」「都会がうらやましい」など、地域の不便さに不満を漏らす声も聞こえてくる。

不便さを不満に思う気持ちは理解できるが、それを差し引いても余りあるこの地域の魅力や日頃、当たり前だと思っているものが貴重な財産であることに気付くことを通して、郷土に誇りをもつことができると考えた。

まだまだ行動範囲の狭い低学年の児童にとって、広く郷土に目を向け、さらにそのよさに気付くということは難しいと思われる。しかし、低学年から地域の文化・自然・地理・人間関係を生かした主体的な活動を積極的に学習活動の中に取り入れていくことは、自分たちの住んでいる地域に親しみや関心をもち、さらに普段見過ごしてしまうようなこの地域ならではのよさに気付くためのきっかけとして、大切であると考えた。

そこで、本研究主題に迫るために次のような指導の手だてを考えた。

### (1) 地域素材の教材化

地域に残る民話に触れさせることで、自分たちの住んでいる地域へ目を向け親しみや関心をもたせるようにする。

### (2) 体験を重視した学習活動の工夫

ペープサートを使って表現する活動をさせることで、より主体的に学習に臨ませるとともに、取り上げた民話に対する意識を高められるようにする。

### (3) 発表の場の工夫

調べてわかったことを発表する場を設けることで、活動への意欲をもたせるとともに、「やってよかった」という充実感を味わわせる。

### 3 単元の目標

- (1) 身近な地域に残る民話に関心をもち、自分の住む地域に親しみをもつことができる。
- (2) 集めた民話を、グループの友達と協力しながら工夫して他のクラスや保育園の子に伝えることができる。

### 4 評価規準

#### 【生活への関心・意欲・態度】

- ・地域に残る民話を興味をもって聞いている。
- ・自分でも地域に残る民話を探してみようとしている。

#### 【活動や体験についての思考・表現】

- ・地域に残る民話を探すためにどんな方法があるか考え、行動することができる。
- ・グループの友達と協力しながら工夫してペープサートに表すことができる。
- ・分かりやすく伝えるために、セリフの言い方や紙人形の動かし方を工夫して、表現することができる。

#### 【身近な環境や自分についての気付き】

- ・他のグループの発表を聞き、よいところに気付いて、自分たちの発表に生かそうとしている。
- ・自分たちの生活する地域にも、昔から伝わるいろいろな話が残っていることに気付いている。

### 5 単元設定の理由

2年生の児童の行動範囲はまだまだ狭く、自宅や学校、仲のよい友達の家とその周辺に限られている。また本校は学区域が広く、電車やケーブルカーを使わなければ行くことのできない場所もあり、地域全体の様子をつかみにくいという面もある。そのような中で、2年生の児童に「地域のよさに気付かせる」ことは簡単ではないと思われる。そこで、まずは自分たちの住んでいる地域に親しみをもたせるような取り組みができないかと考え、地域に昔から伝わる民話に触れさせることとした。

全国各地に言い伝えられている民話・昔話の多くには、キツネやタヌキ、カッパや天狗といった低学年の児童が興味をもちそうな生き物（想像上のものも含む）が登場する。本校の周囲の地域にもそういった話がいくつか残されているが、残念ながらあまり児童に知られていない。「この大木の枝に天狗が腰掛けていた」とか「このお寺には天狗の書いた文字が今でも残っている」というように自分の身近な場所も出てくる話は、子どもに限らずワクワクしてくるものである。またそれらの話をペープサートにして同級生や保育園児に発表する活動を通し、地域の財産を他者に伝達・発信していくことにも挑戦させたい。

このような学習を通して、2年生の児童なりに自分たちの住む地域というものを意識し身近な親しみをもち、今後さらに関心をもってくれることを期待し本単元を設定した。

## 6 児童の実態

本校では唯一2学級ある学年で、男女10名ずつ、計20名の学級である。全体的に素直で優しい児童が多く、友達関係も良好で日々の学校生活を楽しんでいる。

20名のうち徒歩で通学してくる児童が13名、電車通学の児童が7名となっており、各家庭が広範囲に広がっている。そのため児童同士の放課後の交流は、学校周辺の児童を除いて保護者に車で送迎してもらわなければいけないため、家の中や家の周りで過ごす児童も多い。

祖父母と同居している児童は20名中11名と多く、他の児童も近所に祖父母が暮らしているケースが多い。

生活科の学習で学校の周辺の様子を歩いて調べることは1年生の時からやってきたが、広い学区のほんの一部しか見るできないのが残念である。したがって児童の意識としての「自分の住んでいる地域」がどの程度の範囲のものなのか、不明である。

1年生の時に学芸会を経験し、人前で表現する楽しさを味わった児童たちだが、人前での発言の音がやや小さくなってしまいう児童が3、4名いる。ペープサートを作り発表する活動に取り組むのは今回が初めてである。

## 7 指導計画（16時間扱い 本時14 / 16時間）

時	主な学習活動	支援 評価
1	A地区に残されている昔話を聞き、他にも民話や言い伝えを聞いたことがないか話し合う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">A地区に残されているお話集めをしよう。</div>	自分の住んでいる地域に残っている民話を聞くことで、興味・関心を高めるようにする。  自分で探してみようとする意欲がもてたか。
3	A地区に残されている昔話や民話を探す。 ・「うちのおじいちゃんに聞いてみたよ。」 ・「図書室にある本に出ていたよ。」	探すためのいろいろな方法・材料を示す。  自分の力で探そうとしていたか。
2	見付けたお話を、紹介し合う。 ・自分が見付けてきた話を、クラスの中で発表する。 ・「他のクラスや保育園の子にも教えてあげよう。」	クラスで集めた話を、さらに他のクラスや保育園の子どもたちにも発表したいという意欲につなげるようにする。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分かりやすい発表の仕方を話し合う。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>ペープサートにして発表会を開こう。</p> </div>	
7	グループごとにペープサートに表す。	適切な人数のグループ分けをし、協力し合って発表できるようにする。
2	<p>お客さんと呼んで発表会を開く。</p> <p>1回目...2年1組の子を呼んで</p> <p>2回目...二俣尾保育園の子を呼んで</p>	<p>分かりやすく伝える工夫ができるようにする。</p> <p>話の中身がわかるよう、工夫して発表できたか。</p>
1	これまでの活動を振り返る。	地域についてさらに調べたいという意欲につながるようにする。

## 8 各グループが発表する民話

題 名	主 な 内 容
天狗のこしかけ杉	御岳山に今もそびえる樹齢350年の杉にまつわる民話。巨人が腕を曲げたような枝は、村人がいくらまっすぐに直そうとしても、直らない。「何かの仕業に違いない」と確かめに来た村人の前に現れたのは天狗だった。山を見回るため飛び回った後、その杉の枝に腰を掛けて休んでいたのだ。
から沢の話	沢ガニ採りなど、子どもたちの遊び場にもなっている学校近くの沢にまつわる民話。土地を訪れたお坊さんがお経を唱えると、それまで水が涸れていた沢にみるみる水が流れ出した。おかげで土地の人々はずいぶん助かった。
御岳山の白いオオカミの話	御岳山にまつわる民話。ヤマトタケルノミコトが旅の途中で立ち寄った御岳山で、白いオオカミに助けられる。オオカミはみことから「これからも悪い神からこの国を守るよう」告げられる。オオカミは御岳山にとどまり、火災や盗難除けの守り神「お犬さま」として今でもまつられている。
海禅寺に来た天狗の話	海禅寺の寺宝「天狗の書」にまつわる民話。ある晩やって来た天狗。和尚との問答に負けると小さな紙に「雪覆芦花」(ゆきろかをおおう)と書いて立ち去ったという。

## 9 成果と課題

### (1) 地域素材の教材化

2年生の児童に地域に目を向けさせるきっかけとして、今回は地域に残る民話をとり上げた。民話の中には低学年の児童にとって難しい言葉が含まれ、理解に苦勞する部分も少なくなかったが、天狗やオオカミが登場したり、お経を唱えると水が湧き出したりするといった民話は、低学年の児童だからこそ興味をもち、話の世界にすんなり入っていくことができたとも言える。指導者の支援さえしっかりすれば、十分低学年でも扱える素材である。

話を集めてくる活動は、児童の周囲の人々の中にも地域に伝わる民話を知っている人が少なく、本を紹介してもらおう程度であった。それらの話に詳しい専門の方にゲストティーチャーになっていただくという方法も考えられるであろう。

今回は、とり上げた四つの民話のうち、実際にその話が由来する場所に行くことができたのは二つだけであったが、それぞれのお話が「まさに自分たちの住んでいるこの地域のお話なのだ。」との親近感をもたせるためにも、ぜひとり入れるべき活動である。

この学習を終えた後、「もっとこの辺りのことを知りたい。」という声も聞かれた。自分たちの住んでいる地域に親しみをもたせるという意味で、地域に残る民話を教材化したことは有効であったと考える。

### (2) 体験を重視した学習活動の工夫

集めた民話をペープサートにして演じる活動を通し、それらの民話と児童との距離がぐっと縮まったように感じる。人形作りから、人形の動かし方、ナレーションの仕方など、グループ内でよく協力しお互いに意見を出し合い、一人一人主体的に活動する姿を見ることができた。

ペープサートなど劇化する上で、子どもたちが最初にもつ課題に「この話に出てくる人はどんな服を着ていたのか。」とか「背景には何を描けばいいだろう。」といったことが挙げられる。高学年では、その民話に描かれている時代の地域の様子や人々の生活などについて調べさせるなど、学習活動に広がりをもたせることもできるであろう。

### (3) 発表の場の工夫

今回は、隣のクラスの児童と近所の保育園児をお客さんとして招待し、グループごとに順番に発表するという形の発表会を開いたが、発表の場としてはいろいろな方法が考えられたであろう。

民話の中の言葉が難しいこともあり、若い児童・園児を対象にするよりも、もっと高学年の児童や保護者・地域のおじいさん、おばあさんに聞いていただくという形の方が適当であったかもしれない。その方が、発表後の質問や意見・感想が活発に出され、学習に深まりがもてたであろう。また、年長者からほめられたり認められたりすることが、児童の自信につながることも期待できる。

さらに、広い場所を使って四つのグループが一度に発表する「お店屋さん形式」の発表会や、ビデオに録画したものを見ていただく方法なども考えられた。

いずれにしても発表の場を与えたことによって、明らかに児童の活動の意欲や、活動を終えた後の達成感が高まったことは間違いない。

## 研究の成果と今後の課題

本研究では、自分たちの住む郷土に誇りをもつとともに、自分に誇りを持ち、臆することなく積極的に行動することのできる児童を育てていきたいと考え、地域とのかかわりや郷土のよさに気付く活動を取り入れ、実践を通じて検証を行ってきた。

ここでは、指導の手だてを通して成果と課題を述べる。

### 1 研究の成果

#### 地域素材の教材化

西部山間及び島しょ地域では、地域素材が特に豊かである。各教科等の指導では、地域素材を教材として活用できるよう単元・題材を工夫した。例えば、「氷川獅子をつくろう」では地域の伝統芸能を体験し、「バードカービングを作ろう」では地域の自然（野鳥）に目を向け、「お話さがし」では地域の民話に触れるなど、住んでいる地域への親しみや関心をもてる教材を取り上げた。また、その教材にくわしい地域の方にゲストティーチャーとして参加していただいた。どの教材も児童にとっては大変身近なものであり、その地域固有のものである。地域の素材を生かした指導の工夫により、児童は地域に目を向け、そのよさに気付き、郷土に対する愛着を深めることができた。

#### 体験を重視した学習活動の工夫

実物に触れることにより、一人一人が多くの気付きや疑問を抱くことができた。さらに、作ったり演じたりすることを通して、児童は意欲的になり、主体的に活動に取り組む姿勢がみられた。また、ゲストティーチャーに直接学びながら学習を進めることにより、より効果的な活動をすることができた。

#### 発表の場の工夫

教材に合った発表の場を設けることにより、児童の目的意識が明確になり、意欲的に活動できるようになった。また、多くの人に見てもらい、認めてもらうことによって、児童にはこれまでの活動が評価された達成感を感じるとともに、今後の活動に対する意欲も高まった。さらに、ほめられたことにより児童は自信を積み重ねている。このことが自分自身に誇りをもつことにつながると考える。

### 2 課題

本研究では、地域素材を教材化して研究に取り組んできたが、必ずしも児童が地域に深い関心をもっているとは言えず、教師主導になりがちであった。そのため、教師により教材の選択やアプローチの方法が変わると考えると、活動を継続していく難しさがあると思われる。

また、発表の場は、教材や相手（対象）、場所（形態）などにより、より効果的な場の工夫が必要である。さらに、地域素材によっては、地区ごとに違いがあり、まんべんなく取り上げるには時間がかかるものもある。

本年度の研究をさらに深化させるには、学び得たものを発信したり、情報交換などの交流を図ったりすることを通して、児童が自分に誇りをもてるようにすることが重要である。

平成15年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録  
平成15年度 第31号

平成16年1月21日

編集・発行 東京都教職員研修センター  
所在地 東京都目黒区目黒1-1-14  
電話番号 03-5434-1976

印刷会社名 勝田印刷株式会社